

土肥 新一郎

一 本稿の目的

明治時代以前、平仮名では一つの音節に対して複数の変体仮名を用いていた。その多種多様な変体仮名の中で、一定の規則によって使い分けられている音節が存在する。〈し〉はその一つである。

〈し〉については、語頭には「志」を、それ以外の位置には「し」を用いることが多くの先行研究で明らかにされている¹⁾。なお、本稿の記述において変体仮名の異同に関わらず、すべてのものを言う場合には〈し〉と表記し、特定の変体仮名をいう場合には「志」、「し」と表記する。

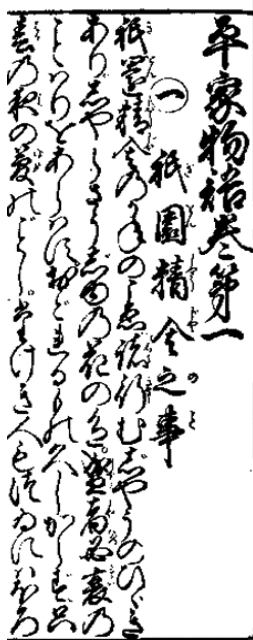
また、語頭ではない位置に「志」を用いる事例が指摘されている²⁾。そのいずれの先行研究も、単語を複数の「まとまり」に分け、その二番目以降の「まとまり」の「かしら」の〈し〉に「志」を用いていることが明らかにされており、多くは字音語にその傾向がみられている。これらの先行研究の指摘をもって、便宜上、「まとまり」の「かしら」を示す機能を「形態素頭表示機能³⁾」と呼称する。

先行研究ではこの機能についての用例が少ないため、どのような単語にこの機能がみられるか確認する必要がある。

そこで本稿では「志」の形態素頭表示機能について悉皆調査を行い、〈し〉の用字法について明らかにすることを目的としたい。

二 対象資料と研究の方法

対象資料として延宝五年（二六七七年）板『平家物語』を選択する⁴⁾。次の画像は対象資料の巻頭の一部分である。



この資料で「志」の形態素頭表示機能がみられたことから、悉皆調査する価値があると考えた。また、『平家物語』は和語と字音語のどちらも使用される文章であると判断し、それぞれにおける「志」の形態素頭表示機能をみることでできると考えた。そして「版本」としたの

はそれが流布を目的としたものであり、その用字法が特定の個人や集団に偏ったものではなく、当時の一般的な用字法であると推測できるからである。

研究の方法として、まず当時の「し」の用字法について『新撰仮名文字遣』を確認する。

次に、延宝五年板『平家物語』巻第一（以下、『平家物語』と呼称）の「し」を含む単語をすべて抽出し、単語のどの位置でどの変体仮名が用いられているかを確認する。ただし、対象範囲は本行とし、振り仮名を対象としなかった。

また、本稿では単語の認定に関して、『日本国語大辞典』第二版の見出しに拠った。ただし、「連語」となっているものは語の構成要素を分解し、それぞれを一語と認定する。また、漢語にサ変動詞が付属したものについては、それを一語ではなく二語と認定する。

三 『新撰仮名文字遣』の「し」の用字法

『新撰仮名文字遣』の「かしらにかゝるかなの事」という条において、

「し」のふ 「し」のゝめ 如是見くるしき也

「し」ら雲 「し」ら露 はなの「し」た陰などは

尤ゆうけん也可書也

とあった。「し」を語頭に用いることを「見苦しい」と評価しつつも、幽玄であれば語頭に用いて良いとしている。

続いて「下にかゝるかなの事」の条では

いは「志」や きか「志」 さひ「志」、此たくひ悪シ他准之

とあった。ここで示される「下」とは、語末であり、語末に「志」ではなく「し」を用いるべきであると、読み取ることができる。「いは「志」や」「きか「志」の「志」は、助動詞「じ」であり、これが語末に該当している。「さひ「志」、の「志」は、形容詞「さびし」の終止形の語末の「志」である。以上に示されるように、語末に「志」を用いるべきではないとしている。

また、『新撰仮名文字遣』の他の条において、多くの用例が掲載されている。その用例において、「志」の形態素頭表示機能がみられるかを検証する。

『新撰仮名文字遣』では、次の画像のように用例が記され、これらが羅列されている。

さい志やう 最上

この画像のように、非語頭「し」に「志」が用いられているすべての用例を掲出する。

さい「志」やう 最上、さい「志」やう 宰相、すい「志」ん 隨身、あゝの「志」、猪、おん「志」やく 温石、えん「志」よ 艶書、もん「志」ゆ 槐、「志」ん「志」つ 真実、にん「志」ん 人身、にん「志」ん 人参、けん「志」ん 賢人、「志」やう「志」ん 正真、てう「志」つ 朝日、こん「志」き 金色

以上のすべての用例では、非語頭の形態素頭に該当する「し」に「志」が用いられていることがわかる。このことから『新撰仮名文字遣』で取り上げられる「かしら」とは、語頭だけではなく、非語頭の形態素頭も含まれることがわかる。

四 「し」の単語内の位置による変体仮名の使い分け

次の表1は『平家物語』における「し」を「語頭」「非語頭」「一音節」の三つの項目を立て、それぞれの変体仮名の用例数を示したものである。用例数の多い変体仮名の用例を網掛けで示した。

表1

		語頭	「し」
一音節	41	172	52
非語頭	56	435	152

先行研究で指摘されている通り、『平家物語』においても、語頭には「し」を、それ以外の場所には「し」を用いる傾向があると、表1からわかる。しかし、この傾向に反する用例は、語頭に「し」を用いた五二例、非語頭に「し」を用いた五六例がある。

はじめに、語頭に「し」を用いる例を掲出する。これらについて、傾向に反する理由があるか考察し、語頭「し」における変体仮名の使い分けを明らかにする。

次に、非語頭に「し」を用いた例を掲出する。これらに、形態素頭表示機能が認められるかを確認し、非語頭「し」における変体仮名の使い分けを明らかにする。

最後に、一音節「し」を、それに下接する語と合わせて掲出する。一音節「し」に「し」を用いた理由を考察し、一音節「し」における変体仮名の使い分けを明らかにする。

1. 語頭「し」における変体仮名の使い分け

語頭に「し」を用いる五二例を掲出する。なお、用例下の○内には、品詞の種類、終止形の表記、用例の活用形を順に示している。

「し」か(助動詞(き)已然形)三〇例、「し」て(接続助詞(し)て)一八例、「し」むる(助動詞(し)む)連体形)一例、「し」も(副助詞(し)も)一例、「し」や(名詞(使者))一例、「し」そく(名詞(子息))一例・・・計五二例

用例より、付属語が五〇例、自立語が二例となり、語頭に「し」を用いるものは、付属語が多いことがわかる。次の表2は、語頭「し」において、「自立語」「付属語」の項目を立て、それぞれの変体仮名について用例数を示したものである。

表2

		「し」
自立語	164	2
付属語	8	50

表2より、自立語の語頭「し」には「し」を、付属語の語頭「し」には「し」を用いるという使い分けがあると言える。

2. 非語頭「し」における変体仮名の使い分け

非語頭に「し」を用いる五六例を掲出する。便宜上、品詞の種類ごとに分類し、名詞に関しては、「字音語」と「和語」に分類した。活用するものについては、終止形の表記と用例の活用形を○内に示し、必要があれば、振り漢字を施したものを○内に示した。

名詞(字音語)… えん〔志〕やう(炎上)二例、が〔志〕ゆん

(雅俊)一例、き〔志〕よく(気色)一例、き〔志〕

ん(寄進)一例、ぎ〔志〕ん(義親)一例、ぎやく

〔志〕き(格式)一例、きん〔志〕う(錦繡)一例、

きんまう〔志〕う(金葉集)一例、けい〔志〕う(荊

州)一例、けい〔志〕やう(卿相)一例、こく〔志〕

つ(黒漆)一例、し〔志〕や(使者)一例、すい

〔志〕やく(垂跡)一例、ずい〔志〕ん(隨身)二

例、せん〔志〕やう(先蹤)一例、ぜんち〔志〕き(善

知識)一例、大〔志〕ゆ(大衆)二例、たう〔志〕や

(当社)一例、た〔志〕やう(多生)一例、太〔志〕

よくわん(太織冠)一例、ち〔志〕やく(智釈)一

例、てう〔志〕ん(重臣)一例、とう〔志〕ん(等身)

一例、へい〔志〕よく(秉燭)一例、む〔志〕よ(墓

所)一例、よう〔志〕う(揚州)一例、れん〔志〕や

(輦車)一例、をん〔志〕やう(恩賞)一例…

計三一例

名詞(和語)… つゝ〔志〕み(慎み)三例… 計三例

形容詞… あたら〔志〕う(新し)連用形)一例、いや〔志〕き(い

やし)連体形)二例、おそろ〔志〕き(おそろし)連体

形)一例、おびたゝ〔志〕う(おびただし)連用形)四

例、かな〔志〕く(かなし)連用形)一例、こひ〔志〕

う(こひし)連用形)一例、にがく〔志〕う(にがに

がし)連用形)一例、まさ〔志〕う(まさし)連用形)

一例、ゆゝ〔志〕う(ゆゆし)連用形)三例、ゆゆしき

(ゆゆし)連体形)一例… 計一六例

動詞… あひ〔志〕らふ(あひしらふ)終止形)一例、たの〔志〕

み(樂しむ)連用形)一例、のゝ〔志〕る(罵る)連

体形)二例… 計四例

副詞… そう〔志〕て(総じて)一例… 計一例

助動詞… まほ〔志〕う(まほし)連用形)一例… 計一例

これらの用例はすべて、非語頭の形態素頭に〔志〕を用いている。

はじめに、名詞(字音語)について考察する。一例目の「えん〔志〕

やう」を例に挙げる。「えん〔志〕やう」を漢字に置き換えると「炎上」

となり、漢字の二字目に当たる「上」の読みは「しやう」となる。こ

の「しやう」の「かしら」の「し」に「志」を用いている。その他の

用例も、同様の箇所に「志」を用いていることがわかる。

このように、名詞(字音語)の非語頭の形態素頭において、「志」

を用い、単語内の構成要素を示していると思われる。それは、名詞(字

音語)が、どういった音と音で構成されているかを示すことと同義で

ある。これによつて読者はどのような「まとまり」で構成されている

か理解しやすくなるのである。

ただし、非語頭の形態素頭の「し」に、「し」を用いる名詞(字音

語)が存在する。以下にそれらを掲出する。

ぎ〔し〕き(儀式)二例、け〔し〕き(景色)二例、け〔し〕

き(気色)一例、ぎ〔し〕き(座敷)二例、〔志〕〔し〕や(使

者)一例、〔志〕ゆ〔し〕やくもん(朱雀門)一例、ぎう〔し〕

ん(造進)一例、は〔し〕どの(波止土濃)一例、ふ〔し〕

ぎ(不思議)一〇例、かう〔し〕(格子)一例、く〔し〕(窮

子) 一例、けんひる(し) (檢非違使) 三例、せう(し) (勝事) 一例、「志」よ(し) (諸司) 一例、せい(し) (制止) 一例、たう(し) (導師) 一例、なを(し) (直衣) 一例、ふ(し) (夫子) 一例、ぶ(し) (武士) 六例、ほう(し) (法師) 一例、法(し) (法師) 一例、やく(し) (薬師) 三例・計四三例

「ぎ(し)き」から、「ふ(し)ぎ」までの用例は、安田氏の論を借りるなら、熟合度の高いものであり、日常生活でも使用するような一般的な名詞(字音語)であったと推測できる。

「かう(し)」以下の、すべての用例の「し」は語末に該当する。「名詞(字音語)の非語頭の形態素頭において、「志」を用いる」という用法よりも、「語末には「志」を用いない」とする用字法が優先されることがわかる。

次に、和語の用例について考察する。和語の用例では、「志」の前が単語の意味を示す核となっており、「志」を含めた後「は、活用語尾や送り仮名のような「付随するもの」となっている。つまり、語の構成を「意味を示す重要な部分」と「それ以外の部分」と捉えており、形態素頭表示機能をもって「志」を用いていると考えられる。

ただし、「あひ(志)らふ」は複合語として捉えることが可能である。そのため、これは、字音語(名詞)と同様に、非語頭の形態素頭において「志」を用いるものである。

以上のことと、表1を踏まえると、非語頭(へし)では、基本的に「し」を用い、形態素頭表示機能をもって「志」を用いることがある、ということがある。

3. 一音節(へし)における変体仮名の使い分け

一音節(へし)に「志」を選択した四一例のうち、一例が助動詞(へき)の連体形、四〇例が動詞(へす)の連用形であった。

これらの四一例は、次に掲出する通り、助詞、助動詞、補助動詞のいずれかが下接している。用例下の○内に、用例に下接する品詞と、その終止形の表記を示した。

助動詞(へき)・「志」が(助詞(へが)) 一例・計一例

動詞(へす)・「志」て(助詞(へて)) 三二例、「志」たり(助動詞(たり)) 三例、「志」たる(助動詞(たり)) 一例、「志」

けり(助動詞(けり)) 一例、「志」ける(助動詞(けり)) 一例、「志」給へ(補助動詞(給へ)) 一例、「志」

給ひ(補助動詞(給ひ)) 一例・計四〇例

一音節(へし)を「志」を用いて表記する場合、その一音節のみを一つの「まとまり」として捉えていたのではなく、下接する語を含めてそれを「まとまり」と捉えていたと考えられる。

以上のことと表1を踏まえると、一音節(へし)では基本的には「し」を用い、下接する語がある場合は「志」を用いることがあるとわかった。

五 形容詞の活用語尾(へし)における変体仮名の使い分け

第四節二項では、用例数の多い名詞(字音語)の、「し」を用いる例を含め、考察をおこなった。本節では、次に用例数の多い形容詞について、活用語尾に(へし)を含むものを対象にし、(へし)の用字法について明らかにする。

活用語尾に(へし)を含む形容詞の用例は一一四例あった。次の表3は、活用形によって項目を立て、それぞれの変体仮名について用例数

『言語生活』二七二 一九七四年、筑摩書房)では、伊達本『古今和歌集』を資料として、「志」は語頭に、「し」はそれ以外の場所に用いられていることを指摘している。

迫野虔徳「定家の『仮名もじ遣』」(『語文研究』三七 一九七四年、九州大学国語国文学会)では、用例を挙げて、以下のように指摘している。

「志」の仮名文字は、定家は大体において語頭に使用し、語中には用いないのである。『更級日記』では「志ほ(潮)」「志ぐれ」「志はず」「志のびね」「志げる」「志か(鹿)」「志る(知)」「志のぶ」「志の(篠)」「志づやか」「志も月」「志ら山」とすべて語頭に用いられている。これは『定頼集』も同じであり、『土佐日記』も「むまのはなむけ志たる」のような例があるがだいたいにおいて語頭に使用しているのである。一方の「し」が、語頭にも語中にも用いられていて『和歌大綱』にいう「上下わかぬし」の用法になつてゐるため、「志」は、『和歌大綱』の示す通り、「下にかかぬ志」という、「志」の仮名のみについての用法にとどまつているが、いづれにしろこれは、美的観点からの用字というより、より機能的性格を帯びた用字とみるべきであろう。

(p.42)

また、久保田篤「恋川春町『無益委記』の表記——平仮名の字体について——」(『茨城大学文学部紀要』二九 一九九六年、茨城大学人文学部)では(へし)の用字法について恋川春町画作の黄表紙『無益委記』を用いて以下のように指摘している。(引用中の「シ」は(へし)、「し」は「し」。「志」は「志」とそれぞれ本稿中の表記と同意。)

シには、両方とも、「し」と「志」の二種類が使われている。この二種は、多くの資料で、語頭「志」——非語頭「し」という使い分けが行われている。この作品でも概ねその傾向に合致すると言つてよいであろう。(p.6)

(2) 前出した、安田章(一九六七年)では、(へし)の用字法について、同資料を用い、以下のように述べている。(引用中の「し」は本稿の「し」と同意。「し」は「志」と同意。用例下の丸括弧内には漢字表記と所在番号が記されている。)

語中に「志」が出る場合は、いくつかの case にくくれるのである。

それは、一語の内部において、二要素に分解し得たとし、その後項を「志」で書いたと考えられるが、それを、

イ 人しち(人質・4その他)

ロ にうほうしゆ(女房衆・41) はないれししゆ(一株・44)

ハ なかしま(長島・10) 八つしる(八代・18) 大しゆ(奥州・24)

ニ せしよ(世上・2) やうしん(用心・2)

しゆし(出仕・18) てんしゆ(天主・79)

と、それぞれ、いくつか例を示して分類した。複合語・接尾語・地名・字音語である。(p.7)

これを受け、安田章「仮名文字遣序」(『国語国文』四〇(二) 一九七一年、臨川書店)では「恵信尼文書」を対象資料とし、その「仮名消息」において「かしら」「まいらじ」「けしん(化身)」「信じん(心)」「しうしん(執心)」の非語頭(へし)に「志」が用いられていることを指摘している。その理由として「化身」以下では熟合度の低い字音語であるためとし、「かしら」「まいらじ」についての理由は不明としている。

また、前出した久保田篤(一九九六年)では、同資料を用いて、非語頭に「志」を用いる例を挙げている。「語頭に準ずる所」に用いる例として「げい(志)や(芸者)」、「お(志)うし(宗旨)」、「お(志)ゆかう(趣向)」、「御(志)うぎ(祝儀)」、「わる(志)やれ(悪洒落)」を挙げ、

「例外」として「つゝ〔志〕んで〔謹〕」を挙げている。

さらに、今野真二「伏流する仮名文字遣」『清泉女子大学紀要』五九二〇一年、清泉女子大学）では〔志〕の形態素頭表示機能が明治期の文献にもみられることを指摘している。以下にそれを引用する。引用中の〈〉は本稿と同様。〈*志〉は、濁点の付いた〈志〉を示す。

明治十八年に刊行された近藤真琴『ことばのその』において「中略
|| 土肥」「し」から始まる見出し項目には〈志〉があてられている。

「シタシ〔親〕」は「〔志〕たし」、「シナジナ〔品々〕」は「〔志〕な
〈*志〉な」と表示されているので、形態素を単位として、形態素
の「上」には〈志〉をあてていると覚しい。『ことばのその』は語釈
において、分ち書きを行なっているが、語釈中においても〈志〉
は使われている。そのことは、分ち書きを読みやすくすることに
寄与しているともいえよう。

明治二十四年に刊行を終えた『言海』は、「索引指南」の(十二)に「活字ノ用半方ハ左ノ如シ」と記し、使用する活字によって、和語と漢語とを表示し分けることを謳う。これは語種への関心のたかさを示すと同時に、使用する活字にも目配りがなされていることを示す。その『言海』において、「シヨウシン〔昇進〕」は「〔志〕よう〈志〉ん」、「シオカラシ〔塩辛〕」は「〈志〕ほからし」、「シイシバ〔椎柴〕」は「〔志〕ひ〈志〕ば」と表示されている。これは、(和語も漢語も)形態素を単位としてとらえ、形態素の「上」には〈志〉をあてるという「方針」かと思われるが、それについての記述はみられない。先に挙げた『辞林』においても、右の語は『言海』と同様に表示されており、この点に関して『辞林』は『言海』に倣っているか。(p.10)

この今野真二氏の論文をもとに「形態素頭表示機能」という語句を用いることにする。

(3) 本稿では、単語を複数の「まとまり」に分け、その「かしら」を「形態素頭」とする。

(4) 「国立国会図書館デジタルコレクション 平家物語」2巻・[11]
(最終閲覧日：二〇一八年五月二二日)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndj/pid/256735?ocOpen=1>

延宝五年(一六七七年)で、洛陽二條通書肆堂開板となつてゐる。縦約二九cm、見開き横約三八cm、一丁片面あたり一五行となつており、一二巻で構成されている。

(5) 大友信一編『駒沢大学 国語研究資料 第三 新撰仮名文字遣』(一九八一年、汲古書院)の影印本文を参照した。これは、国立国会図書館亀田文库御收藏の寛文一三年写本『新撰仮名遣』(上下二巻二冊)である。作者は吉田広典、成立年代は永禄九年(一五六六年)とされている。表題は異なるが内容がほぼ同一であるため『新撰仮名文字遣』の諸本の一つとされている。延宝五年(一六七七年)板『平家物語』の出版された時期と、同期である寛文一三年(一六七三年)に写されたものであるため、これを選択した。

(6) 振り仮名においても〔志〕の形態素頭表示機能を確認できた。しかし、その出現率は低かった。漢字が本行で記されているため、〔志〕を用いて「まとまり」の「かしら」を示す必要性が薄かったと考えられる。

(7) 〈ししや〉における〈し〉の用字法は、第四節に示す通り、「〔志〕〔し〕や」、「〔し〕〔志〕や」の二通りとなる。どちらも同じ字体を連続させないという配慮であると考えられる。「〔し〕〔志〕や」のように、語頭ではなく、非語頭の形態素頭に、〔志〕を用いることを優先する例を確認できた。

(8) 〈し〉に限らず、他の音節でも変体仮名を使い分けることで、形態素頭を示す事例がみられるか検討を行う必要がある。

(広島大学大学院博士課程前期一年)